鷹雄

富永隆一

人々は、気忘そうな表情で鷹雄の前から立ち去った。砂漠における隊商のように、長い列をつくって、人々は重い脚を引きずって行った。しかし、その列は蛇行し、千々に乱れていた。なかなか尽きることのない人々の脚の流れを、鷹雄は薄らいだ意識でぼんやりと見守った。からだ全体に鈍い痛みがあった。人々の疎らな列を眺めながら、鷹雄はその痛みがどうして起こるのかを思い出そうとしたが、記憶ははっきりと甦ってはこなかった。そうしているうちに、眼の前を陽炎がよぎり、鷹雄はまた意識を失くした。永くやすらかな眠りを死者のように貪った。地に伏したまま、みじろぎ一つしないで、重い体を淡い影絵のような夢に横たえていた。数々の暗い記憶がぶつかり合い、はじけ飛び、めまぐるしく行き交った。そして黒く大きな塊になったと思うと、すさまじい勢いで霧のように分解し、鷹雄の意識はぼんやりとまた甦った。

気がついてみると、鷹雄は地に這いつくばいながら、右手を上げて救いを求めていた。そして、どんよりと濁った瞳で、手先を見つめている自分を見出した。掌は鮮血で染められていた。それは鷹雄がようやく為し遂げた、ながい呪縛からの解放のしるしだった。鮮血は腕に流れ、肘から滴り落ちて地面を汚した。鷹雄はおびただしい鮮血の滴りを見ると、思わず身震いした。それは体の内から溢れてくる大きな歓びであった。鷹雄がふと横を向くと、血だまりの中に、一人の初老の男が息絶えようとしていた。鷹雄は歓びのあまり、口を大きく開けると、声高に叫んだ。それは言葉にならない獣の雄叫びに似ていた。鷹雄はしばらく歓びに浸っていた。いつまでもその歓喜を持続させていたいと、ひたすらに願った。そして、口元を歪めると、卑しく不気味な薄笑いを浮かべた。初老の男は全身を小きざみに痙攣させていた。今にも息絶えようとしている、それは死の直前の喘ぎであった。しかし、男はなかなか死を迎えなかった。鷹雄は苛々しながら男

を見つめていた。このまま生き長らえさせるわけにはいかない、と思うと、鷹雄はもう一度、男に食らい付こうとした。しかし、鷹雄の体は型に嵌められたように、その場から動けなかった。鷹雄は焦り苛立った。どうしても息の根をとめなければ。そう思うと居ても立ってもいられず、右手を大きく振りまわして、なんとか男に最後の打撃を加えようとした。しかし、それも無駄であった。強く握った拳は男を打つのではあるが、まるで空を切るような虚しさに囚われていた。男の体は透明になって鷹雄の腕力をかからぶりさせたのである。

男がゆっくりと顔を上げ、鷹雄を見つめた。その眼は意外にもやすらかな色合いを帯びていた。あまりにも柔和なその表情に、鷹雄は拍子ぬけし、肩すかしを食ったような気持がした。それは怨みの表情などではなかった。分身に対する爽やかなまでの、同情のこもった優しい微笑であった。鷹雄は息がつまった。しかし、憐みは捨て去らなければならなかった。儀式は遂行されたのだから。鷹雄はふと思い直してみた。これでよいのだ、と自分を納得させた。男は鷹雄のほうを向いたまま、微笑しながら息絶えた。鷹雄はほっと胸を撫でおろした。そして、男の最期を横目で見ながら、冷ややかに笑った。列に残った最後の一人がそれを見届けると、樹陰から姿を消した。

死んだ男の顔は鷹雄にそっくりだった。鷹雄は自分を可愛がってくれた分身を殺したのだ。生まれ落ちてからこの日まで、鷹雄はその分身を殺すために生きてきたようなものだった。その行為は短く、計画は長かった。そして遂に、鷹雄は鋭い憎悪の刃を分身に向け、切り苛んだ。計略は実行され、ここに分身は確かに葬られた。鷹雄は急に疲れをおぼえると、眼のまわりがぼやけて、安堵感からか、頭からどっと俯せになって地に倒れた。

永い眠りを貪った。傍の銀杏の樹は、その長い年月のために、かつての若々しさを失い、今やすっかり朽ちはてて見るかげもなく、醜い枯れ枝を外気にさらしていた。その老木のように、鷹雄の肉体もぼろぼろになっていた。蟻の大群が老木を覆っていた。細い枝の中にいくつもの穴を

あけ、すっかり樹液を吸いつくしてから、鷹雄の肉体へと移っていった。鷹雄の肉体には、いくらか肉片が残り、へばりついていたからだった。蟻は執拗に鷹雄の肉片を貪った。鷹雄の体は蟻の大群で覆われ、黒々とした塊は身の毛もよだつほどに、ざわざわと蠢いていた。その何万匹もの蟻の塊は、それだけですでに一個の動物のようであった。肉を食いつくすと、骨の中にまで入り込み、みるみるうちに外面から蟻は消えていった。まるで鷹雄の骨に吸い取られるかのように、蟻の群は骨の中へ潜り込んだ。そして、骨髄をもいじきたなく貪り食った。

鷹雄は自分の骨の中で、もぞもぞと蟻が蠢くのを、なんと快いことなのだろうかと思った。蟻の感触はいくらかくすぐったかった。しかし、そのくすぐりは鷹雄を歓ばせた。鷹雄は思わず大きな声で笑い出した。おかしくて仕方がなかったのだ。自分の骨の中で、蟻が自由自在に蠢き、骨髄を蝕んでいるのかと思うと、なんとも滑稽で、笑わずにはいられなかった。その笑い声が聞えたのだろうか、消え去ったはずの最後の一人が、遠くの樹陰からちらっと顔を出し、鷹雄の骨を眺めてにやりと笑った。そして、すぐに顔を引っ込めた。鷹雄の骨は蟻の巣として恰好な場であった。蝕まれていく自分の骨を、鷹雄はこれほど愛しく思ったことは、かつて一度もなかった。鷹雄の骨は涙に濡れて、薄い赤色を帯びると、きらっとかすかに光った。その滑らかな光沢は、鷹雄自身も気にいるところだった。蟻の動きによって、時々、骨は右に左に傾いた。そのたびに軽いめまいに襲われたような気分になるのだった。

春の日、それは暖かな心なごむ一日の始まりだった。湖畔に一羽の鳥が佇んでいた。しかし、よく見るとそれは翼を持った人間であった。それも整った顔立ちをした少年であった。白い翼は肩から足元まで、ゆるやかな曲線を描いて流れている。澄んだ瞳、引き締まった赤い唇、しなやかに細い肉体。燃えるような朝陽が、少年の翼を朱色に染めると、翼はめらめらと火を噴き始めた。少年は燃える翼を勢いよく羽ばたかせると、湖の上を飛びまわった。翼から火の粉が落ちて、

水面を赤く照らした。虹色の輪が何重にもなって水面に拡がり、大きくなると、波になり、湖岸から溢れて、あたり一面を水びたしにした。それは朝陽に染まった、血のような水であった。少年は燃えつきると、湖の底に泡をたてながら沈んでいった。そして二度と浮かび上がってはこなかった。少年は湖に潔くそのはじらいを捧げたのだ。

それは爽やかな目覚めであった。鳥のついばみが鷹雄を目覚めさせた。あれほど群をなしていた蟻は、鳥によってことごとくついばまれ、わずかに残った蟻は、必死で骨の外へ逃げようともがいていた。鳥はそれらの蟻も一匹残らずすべて食いつくした。そして、鷹雄の骨にくちばしを当て、こつこつとついばんだ。まるで鷹雄に親しみを込めるかのように。骨だらけになった鷹雄は、自分の姿を見てみたくなった。そっと鏡を寄せて見ると、そこにはまぎれもない、陶器のような光沢をもった白骨が映っていた。鷹雄はうっとりとなって自分の骨に見とれた。そんな鷹雄に嫉妬したのか、鳥は急に騒がしく鳴くと、飛び上がり、鏡を目がけて突進した。鏡は粉々に割れ、枠の中には、遠い樹々の風景が嵌め込まれていた。そんな灰色の景色を眺めながら、鷹雄は自分の指を咥え、そして舐めてみた。薄荷のような香りが口の中に拡がり、鷹雄は一気に指をかじってみた。指先はチョコレートを割ったように折れ、口の中に滑り込んだ。そして、とろとろになって溶けた。鷹雄は歯先で指を弄んだ。そうしているうちに、指から腕、肩と、鷹雄の意志とは関係なく、ずるずると口の中に引きずり込まれていった。それはまたたく間だった。肩から胸、そして胴、さらに足の先までもが速やかに呑み込まれて、鷹雄はいささか面くらった。

口が大きく開き、めくれると、そのまま内側が外にひっくり返った。口が自分の頭骨を呑み込んだのである。鷹雄はその小気味よさに胸が高鳴った。鷹雄の姿は跡形もなく消えて失くなっていた。そして、そこには目もくらむばかりの星が、何万、何億と光り輝いていた。それでも鷹雄は、そのような星のまばゆいきらめきに、心が激しくときめいた。